

磯城島の日本の国は

言霊の助くる国ぞ ま幸くありこそ

新年度になりました。様々な門出の時期ですね。今回は言霊の歌をご紹介します。飛鳥・藤原に都があったころ活躍していた歌人、柿本人麻呂の歌集に収められていた歌です。

「磯城」は奈良県の地名ですが、「磯城島の」は「日本」にかかる枕詞です。「日本」はこの歌は「反歌」と

やまと
万葉がたり

いって長歌に付随する短歌ですので、長歌(三二五三)も併せて見てみましょう。長歌は「葦原の瑞穂の国は 神ながら 言挙げせぬ国」と始まります。「葦原の瑞穂の国」も日本を指しているのですが、「磯城島の日本」とは表現が違いますね。「葦原の瑞穂の国」は、葦が茂

柿本人麻呂歌集(巻13・三二五四)

る瑞々しい稲穂の国、意な発言はしない、という意味で、神が天から地上を見た時の呼び方に由来します。「この国は神の時代から、神の性質として言挙げ(明言)しない国なのだ」と歌い始めていきます。言葉の力が大きすぎるゆえに、不用怖は今も生きていま

【訳】(磯城島の)日本の国は、言葉の霊力が人を助ける国だ。無事であってほしい。

す。

長歌の後半では「それでも無事でいてほしいと、私はあえて言挙げするのだ」と宣言して、反歌に続きます。

言挙げせぬ国、言葉の助くる国。言葉の霊力を長歌と反歌で両面から歌っています。

「磯城島の日本」の中心で言葉に親しんでいる皆様、どうぞ「ま幸く」いてください。(県立万葉文化館主任 研究員・阪口由佳)

次回回は28日

恋しけば 形見にせむと

わが屋戸やどに 植うゑし藤波

いま咲きにけり

(山部赤人 巻八・一四七二)

今年も藤の花が咲く季節がやってきました。藤原氏ゆかりの春日大社は、有名な「砂ずりの藤」や萬葉植物園のさまざまな藤を観に訪れる人で例年にぎわいますが、昨年引き続き、今年も新型コロナウイルス感染拡大にもなう緊急事態宣言中に見ごろを迎えることになりそうです。

この歌では藤の花を「藤波」と表現しており、藤色の花が一齐に咲き誇り、風にゆれて波打つ優美な様子をほうふつとさせます。この歌は、そうした藤の花を特定の女性をしのぶよすがにしたと解釈する説もありますが、男女の恋の歌として詠まれたのではなかったともいわれます。

やまと
万葉がたり

よく似た歌に「恋しくは形見にせよとわが背子が植ゑし秋秋花咲きにけり」(巻十・二一九)があり、「わが背子」としのぶ相手を明示しているのに対して、一四七一番歌は自ら植えたことが詠まれるだけで、特定の相手がいるのか判然としません。

よく似た歌に「恋しくは形見にせよとわが背子が植ゑし秋秋花咲きにけり」(巻十・二一九)があり、「わが背子」としのぶ相手を明示しているのに対して、一四七一番歌は自ら植えたことが詠まれるだけで、特定の相手がいるのか判然としません。

ホトトギスが鳴く時期とが重なることから、ここに詠まれている

整備された中国式の都でした。堀で四角く区切られた人工的な空間が出現したことで、そこに住む人々は自然の中から植物を移植して育てる楽しみを発見したと考えられます。

ホトトギスが藤の花を好んだと表現した例(巻十・一九四四)もあり、恋しく思っている人間ではなくホトトギスのことだった可能性が高いとも指摘

藤の花を愛するようなこの歌は、自然詠が特徴的な赤人らしい歌といえるかもしれませぬ。(県立万葉文化館指導 研究員・井上さやか) 次回回は5月19日

【訳】恋しくなったら形見にしようとなわが家に植えた藤は、今波打って咲いたことだ。